

イエスと弟子トマ

Jesus and Thomas the Apostle

第5回 「魂が肉体と別れる時」

text: 宝彩有菜

「トマスの福音書」は、1945年に、エジプトのナイル川河畔の洞窟に1850年以上も埋もれていた壺のなから奇跡的に発見されました。これは、イエスの言葉だけを記載してあるもので、「言葉福音書」と呼ばれています。全部で114項目ありますが、そのほとんどが例え話です。一読して何を言いたいのか、良くわからないものが多いのですが、「それらは、瞑想や悟りのお話で、イエスが話した例え話である」と仮定して、では、一体それが何の例え話であるのかを解説しています。今回は、その第5回目です。

なお、各センテンスの訳文は、上段、中段、下段の順に

(1) Thomas O. Lambdin による英訳

(2) Stephen Patterson and Marvin Meyer による英訳

(3) 「トマスによる福音書」(荒井献著・講談社学術文庫)による和訳の順に記載しています。

■ (No.018)

(18) The disciples said to Jesus, "Tell us how our end will be."

Jesus said, "Have you discovered, then, the beginning, that you look for the end? For where the beginning is, there will the end be. Blessed is he who will take his place in the beginning; he will know the end and will not experience death."

(18) The disciples said to Jesus, "Tell us, how will our end come?"

Jesus said, "Have you found the beginning, then, that you are looking for the end? You see, the end will be where the beginning is.

Congratulations to the one who stands at the beginning: that one will know the end and will not taste death."

(18) 弟子たちがイエスに言った、「私たちの終わりがどのようになるかを、私たちに言って下さい」。イエスが言った、「あなたがたは一体、終わりを求めるために、はじめを見出したのか。なぜなら、はじめのあるところに、そこに終わりがあるであろうから。はじめに立つであろう者は幸いである。そうすれば、彼は終わりを知るであろう。そして死を味わうことがないであろう」

この第18項は、「終わり」のことを言っています。弟子がイエスに「終わり」はどんなものですかと聞くと、イエスは、「あなたがたは一体、終わりを求めるために、はじめを見出したのか。なぜなら、はじめのあるところに、そこに終わりがあるであろうから」と答えています。

分かりやすく言えばイエスは、次のように言ったのでしょう。

「終わりを知りたいっていうけど、終わりは今から先のことだから、まだ経験のないことだ。だから、それを知りたいというのは分かる。しかし、君たちは生きている。生きているということは、生まれて来たことだ。だから、はじめは経験したことだ。そこで聞くけど、君たちは、はじめは知っているのかな」

「いえ、イエスさま。はじめもよく知りません」

「そうか、はじめを見過ごしたのだな」

「いやー、見過ごしたというより気が付いたら、母親におんぶされてましたから」

「あはははは、まあ、誰でもそうだ。でも、はじめのところが、終わりのところは同じだよ。はじめが分かると、終わりも分かる。そして、それが分かったら、死ぬことは別に恐い事でもなんでもない、ただ、肉体から魂が離れるだけのことだと分かる」

「そうですか。でも、はじめを見逃してしまった者としては、どうやったらそこが分かるんでしょうね。もう、死ぬまで

分からないんでしょうか。イエス様」

「そんなことはない。修行すれば生きていうちに分かる。そして分かれば、死は恐くなくなる。それは単にはじまりと同じ場所だ」

「それが分かるには、修行ですか」

「そうだ。修行だ」

「笑雲先生」

「なんだい、小松茸」

「イエスは、生まれる時からその場所を通過したのを知っていたんでしょうか」

「それは無いと思う。というか、本当は誰でも知っているのだが、すぐに忘れたものだ。だからそれを思い出したら、そうか、こんな感じかと分かるわけだ。イエスも、修行して悟った後から分かったのだらうと思う。つまり思い出したのだと思う」

「笑雲先生。はじめのとき、つまり、生まれる時というのは、産道を出てくる記憶があるということですか」

「いや、それはないね。そのような物理的な話ではなくて、肉体というものに魂が入ったという時点の話だからね。たぶん、産声を上げた瞬間だと思うが」

「魂というものがあるのですか？　なんだか非科学的ですね」

「そうだね。魂と言っても、形もないし、重さも測れない。小松茸の言うように、確かに非科学的だが、そうだな。命と言った方がいいかな。命は形もないし、重さもない。でも一旦命が消えたら、つまり死んだらということだが、すると、もう二度とその肉体は生き返らない。命はその肉体には戻らない」

「そうですね」

「でも、命は形もなければ重さもない。だから存在しないのかということ、そうでもない。命があるから肉体は動いているのだし、命が消えれば肉体は動かない」

「そうですね」

「科学は確かに発達しているし、いろいろな現象が説明できてきている。でも、今の科学では分からない事もたくさんある。命もそうだし、宇宙もそうだ」

「命は不思議であることは、小松茸にも納得できましたが、宇宙は不思議ではなくなってきましたよ。そのはじまりから分かっていますよ。ビックバンでしょ。笑雲先生」

「なるほど。そうだね。では聞くが小松茸、ビックバンの前はどうなっていたの？」

「はあ、それは分かりませんね」

「どうしてビックバンが起こったの？　何のために起こったの？」

「さあ、分かりませんね」

「このように、科学が発達しても分からないことは依然多いのだ」

「でも、笑雲先生。それを神様の意志だとか言てはいけないでしょ」

「そうだね。分からないことを神様の意志などという、何だか分かったつもりになるけど、それでは宗教になってしまう。雷の仕組みが分からない人が、カミナリは神が怒っているからだなどというようなものだ。幼稚だ。分からないことは分からないと言うのが正しいし、それなら科学的だ」

「でも、命が出たり入ったりは、どうしても分かりませんが。科学的とは思えませんけど」

「ああ、出たり入ったりではないけど、肉体と魂は別だということだが、それが、修行をしたら分かるわけだ。そして、それが分かればそういうことかと、体験的に分かるわけだ」

「なにが、『そういうことか』ですか。笑雲先生」

「だから、生まれることや死ぬことは、つまり、魂が肉体に入ったり出たりすることだってこと」

「そんな風に簡単に言えるようになるには結局悟るしか方法はないんでしょうか」

「逆だね。それが分かれば、すなわち悟っているわけだ」

「では、どうすれば、それが分かるんでしょうか」

「修行」

「はい。そうでした。修行すればそれが分かるという『奇跡』が起こることです」

「そのとおり」

■ (No.019)

(19) Jesus said, "Blessed is he who came into being before he came into being. If you become my disciples and listen to my words, these stones will minister to you. For there are five trees for you in Paradise which remain undisturbed summer and winter and whose leaves do not fall. Whoever becomes acquainted with them will not experience death."

(19) Jesus said, "Congratulations to the one who came into being before coming into being. If you become my disciples and pay attention to my sayings, these stones will serve you. For there are five trees in Paradise for you; they do not change, summer or winter, and their leaves do not fall. Whoever knows them will not taste death."

(19) イエスが言った、「成った前に在った者は幸いである。あなたがたが私の弟子になり、私の言葉を聞くならば、それらの石があなたがたに仕えるであろう。というのは、あなたがたはパラダイスに五つの木を持っており、それらは夏冬揺れず、それらの葉が落ちないからである。それらを知る者は死を味わうことがないであろう」

この項が、前項からの続きの話であるとすると、とても分かりやすいですが、この項単独だと意味が取りにくいです。そこで、この項は前項の一連の話として解説してみたいと思います。

トマスの福音書は114の項目があります。それがどのような意図で並んでいるかを研究する人もいますが、配列順序に全体としての構成意図を解明した研究者は今のところ私の知る限りいないようです。おそらく語録を無作為に拾い集め並べたものだろうと現在のところ言われています。読んでごらんになるとおり、確かに前後の関連はなさそうです。

それぞれの項が何を言っているのか、それが分かれば、関連のありそうなものを寄せて集める作業もできるでしょうが、これほど何を言っているのか分からないものばかりであれば、どれをどう並べるという編集的な作業もできないでしょう。つまり、項を並び変えたり同じようなものを集めたりという編集作業を、この語録が残された時まで誰もしていない可能性も大いにあります。

とすれば、逆に、私はこの配列そのものに意味があるのではないかと考えています。つまり、弟子が聞いた話を最初は聞いたなりにそのままベタに書きとめていたのが、段々と分からない話になってきたと考えることが自然だと思えるからです。そうであれば、この項の並び順はイエスのその時々の一話かたまりの話の流れを温存している可能性があるわけです。そう推量してみることもできるわけです。並び方に意味がある関連したお話が続いている可能性も多いにあるのではないかとことです。

もちろん、そう決めつけて読み進むのは、不要な予見を持って読むことになり、得策ではない場合もあると思いますが、もし、多少でも前後の項目に関連があるのであれば、それによってさらに深いことが分かるヒントを得る可能性があります。もし、そのような読み方をして何か深い事が分かれば、それはそれで貴重な発見に繋がります。本当の解釈を得ることができるかもしれません。

ということで、このあたりは、まとまった一連の話だったかもしれないと「想定して」しばらく読み進めて、解説したいと思います。

すると、結果から言うと、実はまるで纏れた紐がするすると気持ち良く解けるように、円滑に話が流れ進んで行きます。イエスの臨場感溢れる講義の場にご案内しましょう。

さて、前項で、弟子達は「死ぬこと」についてイエスから説明を受けています。

前項では、生きることになったものが、その生きることになる前に在ったことを知っていれば、それは幸いであると

イエスは言っています。肉体に命が入る前の命の段階を知っているなら、それは幸いであると言っているわけです。本項の出だしも、前項と同じことをイエスは形を変えて言っています。

「いいですか。みなさん。成った前に在ったものは幸いです。そうすれば彼は終わりも知るであろうし、そして、死を味わうことがないであろう」

「でも、イエス様、そんなことが分かるんですか。そんなのが分かったら奇跡ですよ」

「奇跡。なるほど、奇跡ねえ。いいですか。ちゃんと私の言うことをきいて、ちゃんと修行さえすれば、そこらの石があなたに仕えるくらいの奇跡は起こりますよ」

「ええっ、本当ですか。イエス様」

「そうです。あなた方は、誰もここに5本の木を持っていて、それらをちゃんと保持しているのですから、それが分かれば大丈夫です。死を味わうことはないです」

「えっ、良く分かりませんが」

「では、説明しよう」

「はい、お願いします」

この項の、前半の「成った前に在った者」とは、この場合自我が目覚める前の状態、つまりただ「真我として在ったこと」を知っているなら、それは素晴らしいと言っています。でも、弟子達は、そのように知ることは、いったいどうすればいいのですかと聞きましたから、イエスは、修行が大切だと言ったわけです。そして修行すれば、路傍の石が家来になるような奇跡的な事も起こるのだと励ましています。

弟子達はそれでもなかなか納得しませんから、イエスは、ここで5つの木の話をしています。話の流れから言うと、ここでイエスは弟子たちに、心の仕組みの話をして、修行することによって、心のどこをどのようにして、その真我に到達できるのかを、詳細に解説したのではないかと思います。

「あなたがたのパラダイスには五つの木があります。それをみな持っています。それらは夏冬揺れず、それらの葉は落ちません」

パラダイスとか天国とか御国の単語が出てきた場合は、大方マインドの仕組みや瞑想の説明の時です。ですからここでは、マインドの中にしっかりした5本の木があると説明しているわけです。

この文章で特徴的な事は「5本の木」です。3本でもなく、4本でもない。5本。さて、5本の木とはいったい何でしょうか？ これは、トマスの福音書の他の項目にも出てきませんし、マタイやマルコの福音書にも出てきません。どこにも出てきませんが、確かに「5本の木」とあります。

何かを伝承する場合、固有名詞とか簡単な数字とかは、あまり変更なく何年も言い伝えられるものかもしれません。なぜなら意味も無く誰かが4つを5つに変えることは無いからです。イエスから5本と言われたのを確かに覚えていたのでしょう。つまり、イエスははっきり5本と言ったのだと思います。

5本とは何か？ そこで、思いつくのが、ブッダがこころの機能を、五蘊(ごうん)に分けて説明している点です。心の働き方を、大まかに五蘊つまり、5つのブロックに分けて詳しく説明しているところです。

ブッダの言う五蘊とは、「色・受・想・行・識」の5つのことで、心の働きの各部署です。確かに葉が茂るようにそこに5つの区分された思考の作業域があるので、五蘊とブッダは言っていますし、イエスも葉の茂った5本の木と言っています。似たような表現だと思えます。

そして、それらを知る者は、死を味わうことがないであろうと、イエスが言っています。この「知る」という意味は、五蘊の中を思考が走っていますが、それらを知る、つまり、自分の思考を完璧に捕捉していることです。そのような人は、死を味わうことはないと言っているわけです。死なないのではなくて、死というものを経験しない、味わわないということです。

「笑雲先生、味わわないって、具体的にはどんなことになるのですか」
 「いいかい、小松茸。死ぬ時は『肉体から抜けること』でもあるが、魂の方から言うと『肉体を返す』ことでもある」
 「誰に返すのですか」
 「さあ、誰だろう。貸してくれた人」
 「神様ですか？」
 「いやー、小松茸、そういうとすぐに宗教になってしまう。神様というのは概念だから、わからないことを何でも神様にしてしまえば、訳がわからなくなる。いいかい、小松茸、分からないことは分からなくていいのだ。それより死を味わわないことが分かる方が大切だ」
 「うへー。それも良く分からない」
 「そうか。小松茸は、どこがどう具体的に分からないのかい？」
 「そもそも、5本の木と、死を味わわないとの関係がさっぱり分かりませんね」
 「なるほど。それを理解するには、心の仕組みをまず理解しなければならない。その説明をしなければならない。とイエスも、そう思ってその話を開始したのだらうな。たぶん、次の項で」
 「そうですか。次の項に説明があるのですか。では、このまま先に進みましょう」
 「了解」

■ (No. 020)

(20) The disciples said to Jesus, "Tell us what the kingdom of heaven is like."
 He said to them, "It is like a mustard seed. It is the smallest of all seeds. But when it falls on tilled soil, it produces a great plant and becomes a shelter for birds of the sky."

(20) The disciples said to Jesus, "Tell us what Heaven's kingdom is like."
 He said to them, "It's like a mustard seed, the smallest of all seeds, but when it falls on prepared soil, it produces a large plant and becomes a shelter for birds of the sky."

(20) 弟子たちが言った、「天国は何に似ているか、私たちに教えてください」。彼が彼らに言った、「それは一粒の辛子種のようなものである。(それは) 小さな種よりも小さい。しかし、それが耕されている地に落ちると、地は大きな枝をつくり、空の鳥の隠れ場となる」

弟子達は、パラダイスに5本の木があるとわれ、いったいパラダイスはどんなところなのか、イエスは一体何を説明しようとしているのか、そもそも、パラダイス、天国ってどういうことなのかと、その説明を求めました。

たぶん、そのあと延々とイエスは心の仕組みについて語ったと思いますが弟子がここで覚えていて書きとめたことは、「それは一粒の辛子種のようなものである。(それは) 小さな種よりも小さい。しかし、それが耕されている地に落ちると、地は大きな枝をつくり、空の鳥の隠れ場となる」ということです。

これは、マタイ(13)、マルコ(4)、ルカ(13)と、三つの福音書にもほぼ同じ表現の言葉があります。つまり、並行箇所のある有名な文言です。

思考の種、とくに、心配や怒り、嫉妬などの種が、マインドの思考のテーブルに落ちると、瞬く間に大きな木に成長して、頭の中を暗くするくらい覆い茂るというわけです。

すでに、説明した「トマス福音書第9項」にも関連があるので再度引用します。

(第9項)

イエスが言った。「見よ、種まきが出て行った。彼はその手に種を満たして蒔いた。いくつかは道に落ちた。鳥が来てそれらを食べてしまった。他の種は岩地に落ちた。そして根を地に送らず、穂を天上に出さなかった。そして他の種は、茨に落ちた。そして、それは良い実を天に向かって出した。それは、60倍、120倍になった」

この例えに出てくる種も、今回の項目で出てくる種も同じ例えで、「思考の種」のことです。それがマインドのテーブルの上に落ちると、瞬間に膨れ上がって大きな木のように茂ってしまうということです。

イエスは、ここでマインドがどのような仕組みで思考をしているのか、そして、それを見ている真我である「本来の自分」との関係などを説明していたのだと思います。5本の木とは、つまり、「色・受・想・行・識」のことで心の機能のことですが、それは、真我の方から見ると「肉体」の一部です。

普通、修行していない状態だと、マインドが自分自身だと思っていますし、マインドから見た肉体を「肉体」と思っています。ですから、マインドが死ぬことはすなわち自分が死ぬことだと当然思っています。ところが修行が進んでくると、瞑想中に、何度も、「マインドが消えてしまう現象」を体験しますので、「本来の自分」つまり、真我は、マインドではないと納得できます。「マインド」は「肉体の一部なのだ」と納得できます。

「肉体は消えても、自分(真我)は在るのだなあ」としみじみと実感できるわけです。するとイエスの言うように「死を味わうことはないのだ」という境地になれるわけです。

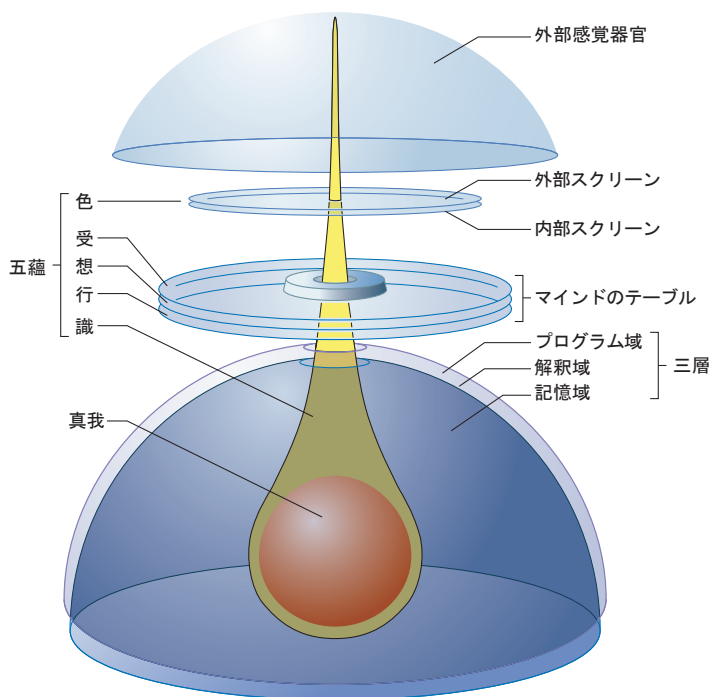
イエスは、このあたりの心の仕組みを詳細に長々と説明していたと思います。

イエスが言ったことを「心のシステム図」 ◆心のシステム図

で現代的に説明しますと、心のシステム図の一番上には、外部感覚器官があり、その下に、順に「色・受・想・行・識」の五蘊、つまり、五つの作業域があります。その下に三層、すなわち、「プログラム域・解釈域・記憶域」があります。さらにその奥に、「真我」があるわけです。

この真我から見れば、五蘊三層もその先の肉体も、すべて「肉体」ということになります。

具体的にいうと、外部エネルギーを「色・声・香・味・触・法」として取り入れる目や耳などの外部感覚器官も、手や足などの肉体も内臓も、全部、肉体です。ここで「法」というのは、五蘊から戻ってくる精神的な刺激、エネルギーですが、それも外部です。真我からみれば自分ではありません。自分より外のものです。さらにこのシステム図の外のものもあります。風や光や物質などです。普通我々が自分以外と思っているものです。つまりマインドが自分以外と思っているものです。



しかし、瞑想中でもそうですが、この五蘊三層がとても静かでクリーンなら、「真我」と「マインドと肉体」は、別物だとわかります。しかし、それが喧騒としていて混乱していると、データが溢れて境も分からなくなります。砂塵がもうもうと立ち込めているような状態では、自分は真我だとは到底思えません。

マインドが活発に活動しているときは真我は覚めてはいません。だから、マインドの砂塵をキレイにする必要があるわけです。でも、思考が一粒でも落ちるとそれは瞬間に大きな木に成長します。どこかで煙が上げればそれはす

ぐにマインドを暗闇にしていまいます。もう一度いいますが、マインドがそのように働いていると真我は目覚めてはいないわけです。

だから、普段からマインドをキレイにしなければいけない。という話を延々とイエスがしていたのだと思いますが、弟子達は話が良く分からないので、だんだん聞く集中力が落ちてきて、ついウトウトと眠くなってきました。

「笑雲先生。そうですよ。眠くなりますよ」

「なんだい、小松茸」

「マインドがどうの、肉体がどうのと言われても良くわかりませんよ。それに、5本の木と、種が成長して大木になる木と同じですか」

「いやー、全然違う。5本の木は五蘊のことだ。大木になる種は思考の種だ。神経電流だ。それが活発に流れ溢れると言う意味だ」

「あー、いやだ。ますます分からない」

「そうか。やっぱり」

「なんで、やっぱりなんですか」

「イエスの弟子もイエスの話がよく分からなくて退屈していたのだらう。そばで聞いていたマリアが、ここで助け舟を出すのだ」

「へえ、そうですか。で、どんな助け舟なんですか」

「それが次に出てくる」

「ほう、なるほど。じゃあ、早く次に行きましょう。笑雲先生」

「了解」

■ (No.021)

(21) Mary said to Jesus, "Whom are your disciples like?"

He said, "They are like children who have settled in a field which is not theirs. When the owners of the field come, they will say, 'Let us have back our field.' They (will) undress in their presence in order to let them have back their field and to give it back to them. Therefore I say, if the owner of a house knows that the thief is coming, he will begin his vigil before he comes and will not let him dig through into his house of his domain to carry away his goods. You, then, be on your guard against the world. Arm yourselves with great strength lest the robbers find a way to come to you, for the difficulty which you expect will (surely) materialize. Let there be among you a man of understanding. When the grain ripened, he came quickly with his sickle in his hand and reaped it. Whoever has ears to hear, let him hear."

(21) Mary said to Jesus, "What are your disciples like?"

He said, "They are like little children living in a field that is not theirs. When the owners of the field come, they will say, 'Give us back our field.' They take off their clothes in front of them in order to give it back to them, and they return their field to them.

For this reason I say, if the owners of a house know that a thief is coming, they will be on guard before the thief arrives and will not let the thief break into their house (their domain) and steal their possessions.

As for you, then, be on guard against the world. Prepare yourselves with great strength, so the robbers can't find a way to get to you, for the trouble you expect will come.

Let there be among you a person who understands.

When the crop ripened, he came quickly carrying a sickle and harvested it. Anyone here with two good ears had better listen!"